

新 年 の こ と ば

戸 莉 義 次

昭和30年代の農業は科学の産物を取り入れて発展した。プラスチック・フィルムの利用は園芸生差に革命をきたし、四季を分たぬ新鮮な蔬菜を食膳に乗せ、葡萄の早出し、稲の育苗に利用がひろまる。耕耘機の普及は過剰とみられるほどであり、自脱型コンバイン・バインダーの収穫機、それに至難とみられた田植機さえ実用の域に達する。

真夏の苦行とされた水田除草は、除草剤の開発で今は昔物語りになろうとする。果樹の摘花、果菜の落下防止、たねなし葡萄と、化学生長調節物質の応用にも目を見張る変化がある。さらに抗生物質の進歩は、実用化とともに将来がますます期待される。

かくして、わが国の農業は面目を一新したのであるが、大筋において反収増を主として狙う部分技術の発展とみるべきであろう。1部が極度に発達し、隙のない脊広に草履ばきの畸形児の感が否めない。このような不均衡は、1部において、また1時において利潤を高めても、全

体としての向上はそれほどではない。まして経済の高度生長下にあつて、その波に乗るところか、波にほんろうされる。

40年代も後半に入ろうとする。早くより云われ、実行は伴なわなかった「経営全体としての向上」を目ざして取り組む意気を昂揚しなければならぬ。それは、科学の産物のみの利用でなく、工業発展にみる「運営の仕組み」の導入である。稲をつくり、牛を飼い、トマトを栽培するという目標の下にあつても、自己完結的に自分1人で終始処理するというのではなく、ある部分を分業的に担当し、地域全体として大きな生産流通組織を形成する行き方である。

農業は今まで独立・自由を尊ぶ職業とされたが、それにこだわる限り発展の限界は家内工業にすぎぬ。外国農業の生産性と太刀打ちするには、工業の手法を踏襲して多かれ少なかれ、ある管制の下に1部担任事項に責任を負い、専心して、従来楽しんだ自由の奪われることを覚悟せねばならぬ。

年 頭 の 辞

農林省農林水産技術会議事務局 研究管理官 仮谷 桂

新年おめでとうございます。

旧年は米の生産過剰、農薬残留など農業上数多くの難問をかかえたまま、国会解散、総選挙

と年末ぎりぎりまで忙しい一年でした。そして、問題の多くは解決を今年に持ち越しています。

恐らく、今年も多事の年になるでしょう。

戦争直後、食糧が窮乏した時代に、全国の稲作研究者を集めて行なわれた試験成績検討会の席上、盛永俊太郎博士から、全国平均収量を2石5斗（10アール当り375キログラム）とする事が出来るか、出来るとすれば、どうすればよいかという質問を投げかけられて、誰も返答し得なかった事を昨日のように思い出します。その時から20年余り、ひたすら「日本人に日本の米を」を目標に努力を続け、今日に至り、その目標は一応達成されました。しかし、一面日本農業の零細な特殊性から、生産費は割高になっています。また、農産物全体としての輸入は年々増加しており、私達のしなければならぬ仕事は数多く残っています。これらの問題の

技術的な解決は、単に外国技術の輸入や模倣では果せないことは今までの経験で十分に証明されており、日本の技術は日本人の手によるものではありません。昭和37年の米の豊作は主として育苗法改善による早植栽培技術、昨今の豊作は主として高度な追肥技術によるものと考えられます。この次の技術は恐らく日本的な農業機械と、それを効率的に利用するための物理的、化学的資材によるものと考えられますが、いずれにしろ、これらを核とした新しい高生産性技術の開発にむかって、明らかな態度で、力強く歩み出すべき、充実した一年となるよう、期したいと思います。

新 年 の 挨拶

農業工業会会長 西 圭 一

70年代の年頭に当たり心からお慶び申し上げます。

かえりみますと、70年代は農業にとって試験を重ねた年代であり、特に除草剤は、一部魚に対する毒性に関連して農薬取締法が改正され、指定農薬の使用規制または登録時の魚毒性試験の実施など大幅に規制が強化されましたが、これらに対応して低魚毒性除草剤の研究開発や適正使用がさらに促進され、関係者の一致協力によりこの困難な事態を克服し、農作業の省力化のみならず農業生産性の向上に寄与してきたことは既にご高承のとおりであります。

しかしながら、昨今、まだ農薬をよぎる毒性問題など世上をにぎわしており、まだまだ進む道は険しいものがあります。70年代からは一

層科学的根拠に立脚し、無用な不安の防止やムードによる支配から脱却することに努めるとともに、政府においても助成するため予算化されようとしている農薬残留毒性研究機関の設立に対しては関係団体挙げてこれに協力し、より低毒性農薬の開発実用化を促進し、安全な農薬と安全な農産物の供給を図っていく考えでありますので、日本植物調節剤研究協会をはじめ関係各位のご理解となお一層のご協力を念願し、新年のごあいさつといたします。